東京古田会2026年10月度（10.31）月例会〔第二部〕説明資料　　作成：新保高之

（1）勉強会『邪馬壹国の論理－古代に真実を求めて－』　参考資料 ④

第四回目は、第Ⅲ編の第一章から第五章について履修していきたい。各章では要点を抽出して提示しているが、不明な点などがある場合は、面倒でも原文で確認して欲しい。

【目次】 Ⅰ.（1）戦後古代史学への疑問、（2）邪馬台国論争は終わった　Ⅱ.（1）邪馬壹国への道、（2）直接証拠と間接証拠、（3）邪馬壹国の諸問題、（4）魏晋（西晋）朝短里の史料批判　Ⅲ.（1）『翰苑』と東アジア、（2）銅鐸人の発見、（3）金印の「倭人」と銅鐸の「東鯷人」、（4）七支刀と年号の論理、（5）九州王朝の古跡
Ⅳ.（1）「海賦」と壁画古墳、（2）倭人の南米大陸への航行について、（3）エバンズ夫妻との往復書簡
Ⅴ.（1）神津恭介氏への挑戦状、（2）推理小説のモラル、（3）続、推理小説のモラル

【今回対象部分の要点】

①Ⅲ.1～3は、東鯷人と銅鐸人とが結びついている可能性。 ②Ⅲ.4は、七支刀に刻印された年号「泰和四年」の解釈。 ③Ⅲ.5は、『隋書』俀国伝の記述から想定される「仏教文化」の痕跡が大宰府周辺に。

【履修対象章の要約その1】

Ⅲ.1 『翰苑』と東アジア　223～224頁

太宰府天満宮に張楚金の『翰苑』第三十巻が保管されている。
①唐の顕慶五年（660）に成立した本だが、この倭国の項の研究は少ない。しかし、②新羅の項に「任那」が実在したことが明記されている。③三韓の項に「東鯷人」が出てくる。一方、④『漢書』地理志（呉地の項・燕地の項）にこの東鯷人は、倭人と好一対で現れる。しかし、⑤東鯷人は『後漢書』では倭伝内に書かれ、『三国志』では姿を消す。つまり、三世紀に突如跡を絶った謎の民族なのである。
⑥『失われた九州王朝』ではこの倭人を、筑紫を原点とする銅剣・銅矛・銅戈圏の国々と見なした。⑦これに東隣する銅鐸圏の国々は、東鯷人（海上、東の端の意か）の国だったのである。いずれ改めて詳報するつもりである。

Ⅲ.2 銅鐸人の発見　225～243頁

従来の研究の大きな欠落： ①（『漢書』地理志（燕地））楽浪海中に倭人有り。分かれて百余国を為す。歳時を以て来り献見す、と云う。②従来の研究方法には大きな欠陥部分あったことに目を注がざるをえなくなった。③それは、従来はいつも、この一節だけが引き抜かれて取り扱われてきたこと。出典全体の中の位置づけについて、殆ど論及されていない。④これ以外の「歳時貢献」記事を調べると、次の文しかない〔（『漢書』地理志（呉地））会稽海外、東鯷人有り、分かれて二十余国を為す。歳時を以て来り献見す、と云う。〕。⑤この二項目をペアにして扱う ――これが必然の方法でなければならぬ。

その「魚偏」の意味： ①「会稽海外」とは、※検討（九州は楽浪・会稽海中、フィリピン群島は楽浪海外・・・）を経て 九州（東岸）の、さらなる東なる領域、つまり日本列島の本州（及び四国）しかない。②「鯷」とは：㋐「是」は、一番端っこという意味。㋑「魚偏」は、中国側が東鯷人を東なる海の中の国としてとらえたため。③呼称「東鯷人」は、「海上、東の一番端っこの人」という意味。④史料性格上、「倭人」と「東鯷人」は一蓮托生の史料である。

青銅器分布と倭人の位置/倭の五王は九州筑紫の王者である：（1） ①『漢書』地理志にいう倭人百余国が銅矛圏に相当する、という命題は誰しも容易に想到しうることであろう。②志賀島の金印は、銅矛圏の中心地、倭人権力の中枢を指し示す黄金の道標なのだった。**（2）** ①『宋書』倭人伝の、倭の五王の記事の末尾に、倭王武の上表文「東は毛人・・五十五国、西は衆夷・・六十六国、渡りて海北・・九十五国」。②西なる衆夷は、倭王自らの都する地の周囲、九州である。③東なる毛人と呼んでいるのは、瀬戸内海領域の西半分（強）。④「海北を渡る・・」は倭都の地から見てストレートに朝鮮半島を「北」と指示。⑤このような論証から、「倭の五王」は九州筑紫の王者、との結論に達した。⑥「漢書百余国」「宋書一百二十一国」という数の一致は、偶然ではない。

貢献記事の史料性格/突然消えた二つの存在：（1） ①結論は一つ、『漢書』地理志にいう「百余国」とは、筑紫を原点とする銅矛圏の国々だった。②すると、さらに東の端っこの「東鯷人」は、銅鐸圏の国々だ。**（2）** ①『後漢書』、会稽の海外に東鯷人有り、分かれて二十余国を為す。この記事が倭伝の中に入っている。②これは、東鯷人は広い意味で倭の一部、と見なしている。③この東鯷人の出現と消滅の絶対年代は、まさに銅鐸圏

の消長にほぼ対応している。④以上の吟味によって、「東鯷人蒸発」時点は、220年(後漢滅亡)と280年(西晋統一)の間にあると見なされる。

私はこう結論する： 以上をまとめよう。①『漢書』地理志の倭人と東鯷人との「歳時貢献」記事は、ワン・セットの史料として扱わねばならぬ。②中国正史に記載された「歳時朝貢」という史料性格上、両記事の信憑性は高い。③東鯷人は、遅くとも三世紀後半に中国史書から姿を消した。④これらから、「倭人＝銅矛圏」、「東鯷人＝銅鐸圏」となる。⑤翰苑の三韓項の東鯷人記事も、これらの帰結を裏づけている。

Ⅲ.3 金印の「倭人」と銅鐸の「東鯷(とうてい)人」 244～250頁

①わたしへの子どもの質問、「銅鐸圏の人々も、銅剣・銅矛・銅戈圏の人々はどちらの「倭人」なのか？」にどう答えようか。②「そう、両方とも「倭人」だ」、と答えることはできなかった。

古代史の中の空洞： ①「楽浪海中に倭人有り。分かれて百余国を為す。歳時を以て来り献見す、と云う。」(『漢書』地理志(燕地))。②「会稽海外に東鯷人有り。分かれて二十余国を為す。歳時を以て来り献見す、と云う。」(『漢書』地理志(呉地))。③**この二つをセットにして**理解しなければならないのに、従来は「倭人」記事だけを、勝手に**切り抜いて**使ってきた。※この部分、**「従来の研究の大きな欠落」**の節と重複している。

孔子は知っていた： ①「鯷」をナマズと読み、**東のなまずの人**では何とも奇妙だ。②「鯷」を「テイ」と読むと、「辺」や「尽」と同じ、一番はしっこという意味になる。③「東鯷人」とは東の一番はしっこの人」。④「倭人」は「東海の島」に住む民族、「東鯷人」は倭人よりさらに東に住む民族。⑤「倭人百余国」は、筑紫を原点とする銅矛・銅戈圏さらに銅剣圏の領域。⑥「東鯷人」とは**銅鐸圏の人々**である。 ※この部分も重複している。

神聖な音楽を献上： ①東鯷人と銅鐸人との共通性は、地理的位置だけではなく、消滅時期が一致(三世紀の初・中葉から末葉にかけて)すること。②「是」は、**四辺の夷蛮が中国天子に献じた音楽**に関係した文字。「東鯷人」は特産物の「魚」だけでなく、“自己独特の民族的楽器による音楽を献上したのではないか？”。

【履修対象章の要約その2】

Ⅲ.4 七支刀と年号の論理 251～254頁

①七支刀の歴史的意義については、長らく神功紀の七枝刀記事に基づき読解・評価されてきた(たとえば福山敏男説)。“泰和四年(369)に百済王が倭王に七支刀を献上した”とするもの。 ②ところが近年、逆の解釈(金錫亨「この刀は百済王が倭王に下賜した」とする”金理論”)が出された。 ③わたしはこの二説のいずれにも与することができなかった。両者とも中国天子下における侯王で対等の立場にいる。 これに対し、④近年「金理論の修正説」が学界に現れている(上田正昭氏と李進熙氏)。 ⑤上田説では、泰和四年を従来通り東晋の年号としながら百済王から倭王への下賜、とする。だが、東晋年号を用いた銘文は、必ず東晋を原点(天子)として読むべきもの。

一方、⑥李説は、泰和四年を「北魏の年号」(48015 年)としながら、百済王原点主義(百済王の侯王としての倭王)の読み方をしている。

【履修対象章の要約その3】

Ⅲ.5 九州王朝の古跡 255～257頁九州王朝なるものを示す跡をいくつか辿ってみよう。

①九州歴史博物館には大宰府跡出土の瓦が数多く陳列されているが、並んで、より古形の「塔原(とうばる)廃寺の瓦」がある。「塔原」は太宰府付近(筑紫野市)の地名。「廃寺」とされるが、寺名が不明。

②基山頂上の城跡に「北帝門」「仏谷門」「萩原門」がある。近畿には「北帝」や「仏谷」名の門はない。『隋書』俀国伝の多利思北孤が「天子」と「仏教」の二つを結びつけていたことが思い出す。

③欽明紀に不思議な記事がある。(欽明23年8月)「天皇は狭手彦を遣わして高麗を伐(う)たしめ、その戦利品として「鉄屋(くろがねのいえ)」を得た。A.鉄屋は長安寺に在り。B.是の寺、何れの国に在りということを知らず」。※「朝倉社恵蘇八幡宮・・・社僧の坊を朝倉山長安寺といふ。(注)朝闇寺なるべし」(大宰管内志)。

④どうやら、わたしたちは筑紫のいたる所に九州王朝の遺跡を眼前にしながら、かたくなにこれに目をつぶってきたのではあるまいか。

（2）読書会〔清寧・顕宗・仁賢天皇紀〕 ※日本書紀巻第15 参考資料⑤

岩波文庫本『日本書紀』(3)： 92～143頁に掲載

〔清寧・顕宗・仁賢天皇紀〕履修の第5回目（最終回）は、この三天皇紀の概要を再確認し、市辺押磐皇子受難の記事ついて『古事記』の記述と比較してみたい。

1．各天皇紀の構成・主要記事と特徴

【清寧紀】 **(1)**即位前紀及び元年(480)～五年(484)11月条までの歴史的諸活動を以下のように記述。
雄略天皇の第三子として誕生。雄略天皇二二年1月、太子に立てられる。雄略天皇二三年7月、天皇が病気になり政務を委ねられる。8月、父帝が崩御。それに伴い吉備稚姫と星川皇子が起こした反乱を鎮圧。
清寧天皇元年1月、即位（皇后はいない）。二年2月、白髪部を設置。11月、市辺押磐皇子の子息・億計（おけ）と弘計（をけ）を発見。三年1月、二人を皇子と認め宮中に迎え入れる。五年1月、崩御。11月、河内坂門原陵に葬られる。
(2)この間、雄略紀に何度もあった海外への派遣記事が全くない。事績としては、①星川皇子の反乱を鎮圧したこと、②発見された億計と弘計を宮中に迎え入れたこと、くらいである。

【顕宗紀】 **(1)**即位前紀と元年(485)～三年(487)是歳条まで歴史的諸活動を次のように記述。即位前紀：①弘計・億計二王子の苦難、②二王子が身分を明かす、③皇位を互いに譲り合う。元年：④弘計王が即位を承諾（正月）、⑤置目老嫗（おきめのおうな）の功績（2月）、二年：⑥復讐を思い留まる、三年：⑦天皇が崩御、⑧任那と百済との攻防（是歳）。
(2)①即位前紀だけで全体のほぼ半分を占めている。②即位前紀を含めて三年条まで、その殆どが説話的な記事で埋め尽くされている。③その中でも、歌謡詞と中国等の史籍に基づく文飾が目につく。

【仁賢紀】 **(1)**即位前紀と元年(488)～十一年(498)是歳条まで歴史的諸活動を次のように記述。①（億計）天皇が即位（元年）、②難波小野皇后が自死（二年）、③石上部舎人を設置（三年）、④日鷹吉士を高麗に遣使（六年）、⑤飽田女の説話（六年）、⑥小泊瀬稚鷦鷯尊を皇太子に（七年）、⑦天皇が崩御（十一年）。
(2)①「仁賢（億計）天皇紀」は、顕宗（弘計）天皇よりも遥かに即位期間が長いのに、記事量は極めて少ない。②その中で、高麗遣使・日鷹吉士と飽田女の説話が比重を占めている。③顕宗紀に多出した歌謡詞や「曲水の宴」が全く見られない。また、④記事には持統紀と類似した用語が散見される。

2．『古事記』による市辺押磐皇子関連記事（『日本書紀』と比較）

『古事記』では安康・清寧・顕宗の各天皇記に、『日本書紀』では、雄略・清寧・顕宗・仁賢・武烈の各天皇紀に、それぞれ記載されている。ただ、『記』と『紀』とでは、掲載の順序・内容や記載する天皇記・紀が一部で異なっている。

『古事記』安康記(1)【市辺忍歯王の難】（これより後のこと）近江佐佐紀山君の祖先・韓帒（からふくろ）が大長谷王に「近江の久多綿（くたわた）の蚊屋（かや）野に猪・鹿が沢山います。その立っている足は薄原の如く、頭にささげた角は枯松の様です」と申し上げた。大長谷王は市辺之忍歯王を誘って、その野に行かれ別々に仮宮を作りお泊りになった。翌朝早く、まだ日が昇らぬうちに忍歯王は何の御心もなく御馬に召されながら、大長谷王の仮宮の傍に馬を留めて供人に「まだお目覚めではないようだ。早く申し上げなさい『夜はもう明けきっているから、猟場にお出で下さい』」と言って、馬を進めて行かれた。ところが供人は大長谷王に「忍歯王は要らぬことに人の世話を焼いたりする方なので、ご用心されるように。御身支度も堅くしてお出かけください」と申し上げた。そこで大長谷王は御衣の下に鎧を着け弓矢を執り持って御馬に乗って出かけられた。直ぐに追いついて馬を並べて進みながら。いきなり矢を抜いて忍歯王を射落とし、その御身を斬って馬の飼桶に入れて穴に埋め、その上を平らに均してしまわれた。

『日本書紀』雄略即位前記（安康天皇三年10月1日）天皇（雄略）は安康天皇が従兄弟・市辺押磐皇子に・・・後事を委ねようとしていたことを恨み、・・・「狩をしよう」と騙して約束・・・、弓を構えて馬を走らせ「鹿がいる」と騙し叫んで皇子を射殺した。舎人・佐伯部売輪（仲子）・・・。雄略はこれを皆殺しにしてしまった。**顕宗即位前記(1)**・・・安康（穴穂）天皇三年10月、天皇の父・市辺押磐皇子と舎人・佐伯部仲子は近江国蚊屋野で雄略（大泊瀬）天皇に殺され、同じ穴に埋められた。

『古事記』安康記(2)【二王子は播磨へ】市辺之王の王子・意祁と袁祁王の二方はこの変事をお聞きになって直ちに逃げ去られた。山城の苅羽井（かりばい）まで逃げて食事をとっておられると、黥刑を受けた老人が来て、食物を奪い取った。王子が「食べ物は惜しまないが、お前は誰だ」と尋ねると、「山城で食糧の猪を飼う者だ」と。二王子はそこで玖須婆（くすば）の川を逃げ渡って播磨の国に至り、その国の志自牟（しじむ）と言う者の家に入って、素性を隠して馬牛飼の童となられた。

『日本書紀』顕宗即位前記(2)天皇（弘計）と億計王は父が射殺されたと聞き、共に逃げて身を隠した。舎人・日下部連使主と吾田彦〈使主の子〉は天皇と億計王をお守りして難を丹波国余社郡に避けた。（略）天皇は兄王を促して播磨国赤石郡に行き、共に名を丹波小子に変え、縮見屯倉首〈忍海部造細目〉（しじみ）に仕えた。吾田彦は離れないで長く従い仕えた。 ※仁賢紀即位前記にも「丹波国余社郡に難を逃れた」とある。

『古事記』清寧記（1A）【二王子発見】 天皇崩御後、皇位を継承する御子がなかったため尋ねると、市辺忍歯別王の妹・忍海郎女・亦名、飯豊王が葛城忍海の高木角刺宮におられた。
山部連小楯は播磨国司に任命された時、その国人・志自牟（しじむ）の家に新築祝いに行った。

『日本書紀』清寧紀（1A）二年11月、大嘗祭の供奉を整えるため派遣した播磨国司で山部連先祖・伊予来目部小楯が、明石郡の縮見屯倉首・忍海部造細目の新宅の宴で市辺押磐皇子の子息・億計と弘計を発見した。

『古事記』清寧記（1B）【酒宴で弘計王が身分を名乗る】盛んに酒宴が張られて宴たけなわになった時、皆が席順に舞をすることになり、竈の傍らで火を焚く二人の少年にも舞わせようとした。すると、その一人が「兄さん、先に舞って下さい」「いや、お前が先に舞いなさい」と相譲るさまを、人々はおかしがって笑った。結局、兄が先に舞い、次に弟が舞う段になって、節をつけて声を長く引き調子をつけながら、**〔物部の武士どもが帯びている大刀の柄には赤土を塗って下緒は赤布でして　また赤い旗を立て俄かにそれもどこへやら　隠れ潜んだ山裾の竹の根を刈り枝末を押し靡かしているように　また八絃の琴の音を調べ整え弾くように　天下を治められた履中天皇の一の御子　市辺の忍歯王の御子　我らが皇子のなれの果て〕** と仰せられたので、小楯は吃驚して椅子から転げ落ち、その家にいる人々を追い出して、二王子を左右の膝の上に抱き上げ奉り泣き悲しんだ。それから人を集めて仮宮を作り、坐さしめて都に急使を立てた。御姨・飯豊王はこれを聞いてお喜びになり、角刺宮に招き入れられた。

『日本書紀』顕宗紀即位前記（3）①白髪（清寧）天皇二年11月、（略）夜通しの酒宴に。②億計王が舞い、天皇（弘計王）が立って衣帯を整え、家賞めの歌を歌われた〔省略〕。③家賞めが終って、琴の音に合わせて歌って〔省略〕。④小楯が「これは面白い。どうかまた聞きたいものだ」と。天皇は遂に殊舞（たつづのまい）をされ叫び声を上げて**〔・・・市辺宮で天下をお治めになった、押磐尊の御子であるぞ、私は〕**と歌われた。⑤小楯は大いに驚いて席を離れ・・・、人民を集めて造宮・・・日ならずして出来た宮に仮にお入り頂き、京に二人の王子をお迎え頂くよう求めた。⑥清寧天皇はこれを聞いて喜び感激して「・・・丁度よい後継ぎができた」と。・・・播磨国司来目部小楯に節を持たせ、明石に迎えさせた。⑦白髪（清寧）天皇三年正月、天皇（顕宗）は兄王に従って摂津国に着かれ、青蓋車にお乗りになって宮中に入られた。 ※清寧紀二年11月条、仁賢紀にも同様な記事や略記がある。

『古事記』清寧記（2A）【袁祁命と志毘臣（歌垣等）】 この二王子が皇位におつきになろうとする頃のこと。平群臣の祖先・志毘臣は、歌垣に出て袁祁命がお婚（め）しになろうとする少女の手を取った。彼女は菟田首の娘で大魚という名だった。袁祁命もまた歌垣に出られた。そこで志毘臣が歌って、**〔大宮の　彼つ端手　隅傾けり〕**と。かく歌い、その歌の末を請われて袁祁命が**〔大匠　拙劣みこそ　隅傾けり〕**と。志毘臣がまた、**〔王の　心を緩み　臣の子の　八重の柴垣　入り立たずあり〕**と。ここで王子がまた歌い、**〔潮瀬の　波折り見れば　遊び来る　鮪が端手に　妻立てり見ゆ〕**と。すると志毘臣はますます怒り、**〔大君の　王子の柴垣　八節結り　結り廻し　切れむ柴垣　焼けむ柴垣〕**と。王子がまた歌われ、**〔大魚よし　鮪突く海人よ　其があれば　心恋しけむ　鮪突く鮪〕**と。
　このように歌って夜を明かし、各々引き取られた。その朝早く、意祁命と袁祁命の二人が議して「朝廷に仕える者どもは、朝は朝廷に参るが昼は志毘の門に集まる。朝早い今頃は志毘も寝ていて誰も集まっていないだろう。この時期を外すと彼を倒し難いと思う」と。そこで軍兵を集められ、志毘臣の家を囲んで殺された。

『日本書紀』武烈紀即位前記に次の記事がある。
①平群真鳥・と鮪父子の専横、②影媛と鮪の歌会、③父子を討伐して武烈天皇が即位。

『古事記』清寧記（2B）【袁祁命（弘計王子）が即位】 さて、二王子は互いに皇位を譲り合いなられたが、意祁命が弟の袁祁命に「針間の志自牟の家に住んでいた時、そなたが名を明かさなかったら、天下を治める身にはならなかったと思う。これこそそなたの功績だ。だから、私は兄だが、どうしてもそなたが先に皇位につくべきだと思う」と言って、堅くお譲りになった。 それで、断り切れずに袁祁命が先にご即位された。

『書紀』顕宗紀即位前記（4）①清寧五年正月、天皇が崩御。②この月、皇太子（億計）と天皇（弘計）が位を譲り合い、長らく位に就かれなかったため、③姉・飯豊青皇女が忍海角刺宮で仮に朝政、忍海飯豊青尊と名乗った。④11月、飯豊青尊が崩御、葛城埴口丘陵に埋葬。⑤12月、臣下の奏上と億計王とのやり取りを経て漸く即位を決意。

『古事記』顕宗記（1A）【置目老媼①】 天皇が父王・市辺王の遺骨を探し求められた時、淡海国の賤しい老婆が参上して申し上げるに、「王子の遺骨が埋まっている所を私はよく存じております。遺骨の御歯で分かります」と。御歯は三枝のように三つに分かれた八重歯であった。そこで民を従えて赴かれ、そこの土を掘ってご覧になると、まさに探し求めていた御遺骨であった。その蚊屋野の東山に御陵墓を作って葬られ、韓俘（からふくろ）の子等をその陵守に命じられた。

『日本書紀』顕宗紀元年2月、①一人の老婆（置目）が「お骨の埋められた所を知っている」と申し上げた。 ②天皇と億計は蚊屋野の中に赴き、掘り起こすと、老婆の言葉通りだった。 ③だが、仲子の屍と皇子の屍が入り交って見分けがつかなかった。 ④蚊屋野の中に二つの陵を全く同じように造り、葬儀も同じようにした。
※顕宗紀元年5月条に、狭々城山君韓袋宿禰の記事がある。

『古事記』顕宗記（1B）【置目老媼②】 ご帰還後にかの老婆を召され、その場所を忘れずにいたことを賞して、置目老媼の号を賜(たまわ)れた。そして宮中に召し入れられて厚遇された。その老婆の住む家を皇居の近くに作られて、毎日必ずお召し寄せになられた。御殿の戸に大鈴をかけて老婆をお召になりたい折には、この大鈴を引き鳴らすことを定められた。これによって御歌がある。〔**浅茅原　小谷を過ぎて　百伝ふ　鐸ゆらぐとも　置目来らしも**〕
そのうちにある日、置目老媼は参上して「私はとても年を取りましたのでお暇を戴いて故郷に下がろうと存じます」と申し上げた。言うままにお下げになる時、天皇はお見送りをされて歌われた。
〔**置目もや　淡海の置目　明日よりは　み山隠りて　見えずかもあらむ**〕

『日本書紀』顕宗紀元年2月（続き）置目の老婆に詔して、宮の近くに住まわせて敬い恵み、不自由のないようにされた･･･。天皇は遥かに鈴の音を聞かれて歌を詠まれた。〔**浅茅の原、痩せ地を遠く駅鈴の音が、伝わって行くように、鈴が鳴っている。置目の老婆がやってくるらしい**〕　二年9月、置目が老窮して郷に帰りたいと申し出て「もう気力が衰え耄碌しました。たとえ縄に頼っても歩くことができません。帰郷して生を終わりたいと思います」と。天皇はこれを聞いて痛まれ「賜物を多く下さった。別れることを悲しみ、再び会えないことを歎かれて歌を賜った。
〔**置目よ　近江の置目よ　明日から故郷に去り　山に隠れて見えないだろうなあ**〕

『古事記』顕宗記（2）【山城の猪飼を処罰（安康記（2）関連）】天皇が災厄に遇って逃げられた際に、御食物を奪い取った猪飼の老人を探され呼び寄せられた。飛鳥の川原で斬って一族残らずにその膝の筋を断たせた。それで今に至るまで、その子孫の者が大和に上がる日は、必ずおのずから跛を引いて歩くのである。
またその老人の在所を、かの時によく見定めておかれたので、その地を志米須(しめす)と言うのである。

『日本書紀』顕宗紀元年5月、狭々城山君韓袋宿禰は陰謀に加わり、押磐皇子の殺害に加担したので誅殺されそうになったが、叩頭して申し上げる言葉がひどく哀れだったため、天皇は殺すに忍ばず陵戸に落として賤民とされ官籍を削って山部連の下につけさせられた。※『古事記』では【顕宗記（1A）に掲載。
一族の倭袋宿禰は妹・置目の功によって救われ、本姓の狭々城山君の氏を賜った。

『古事記』顕宗記（3）【御陵の土】 天皇は、父王を殺した大長谷天皇に深い恨みがあられ、その御霊に復讐したいと思われた。そこで、大長谷天皇の御陵を破壊しようとされ、人を遣わそうとされた時、兄の意祁命が「御陵を壊すために人を遣わしてはなりません。私が赴いて陛下の御心通りにしてまいりましょう」と奏言された。天皇が「ではお願いします」と言われたので、意祁命は自ら出かけられ御陵の傍らを少し掘って、「壊してまいりました」と奏言された。天皇は帰りが早すぎるのを訝って、「どのように壊しましたか」と尋ねられた。「御陵の傍らの土を少し掘っておきました」と答えられると、天皇は「父王の仇に報いるため、その陵をすっかり壊したかったのに、どうしてそんな形式だけで帰って来たのですか」と。答えて「父上のお恨みを先帝の御霊に報いさせたいとの御心は誠に最もなことですが、大長谷天皇は父上の仇ではあれど、我々の叔父上で、かつ天皇でもあられた。一途に仇であるとの意味だけで皇位に在られた天皇の御陵を悉く壊したら、後世の人々が必ず誹るに違いありません。父上の仇に報いなければならず、御陵の脇を少し掘りました。既にこうして恥をお見せしたのですから、後世に示すにも充分だと存じます」と。 天皇は「それは誠にもっともな話だから、その程度で済ますことにしましょう」と。

『日本書紀』顕宗紀二年8月1日、天皇は億計皇太子に「我が父王は罪なくして雄略天皇に殺され、屍を野良に捨てられて未だにはっきりしない。憤りの気持ちが一杯にある。･･･。天子となって二年、願うことは雄略天皇の墓を壊し遺骨を砕いて投げ散らしたい。今この仕返しをしたら親孝行になるのではないか」と。億計皇太子は諫めて「雄略天皇はあった万機を統べ天下を照臨された･･･。我が父王は天皇の子であるが、難に遇って天位に登られなかった。これを見れば尊卑が異なっている。･･･清寧天皇の厚い寵愛と深い恩を蒙らなかったら、どうして天位にあり得ようか。雄略天皇は清寧天皇の父である。陛下は国を治められ、徳行は天下に聞こえている。それなのに陵を壊し天下に示せば、国に臨み人民を子とはできないだろうと恐れる」と。天皇は「よいことを言ってくれた」と言われ、民を使役することを止められた。　※億計皇太子は雄略天皇陵に行っていない。

『古事記』顕宗記（4）天皇崩御後、意祁命（仁賢）が即位された。
（顕宗）天皇は御年38歳で崩御。八年間在位され、御陵は片岡石坏岡上にある。

『日本書紀』仁賢紀即位前記　顕宗天皇三年4月に弘計天皇が崩御された。元年10月3日、顕宗天皇を傍丘磐杯丘陵に葬った。